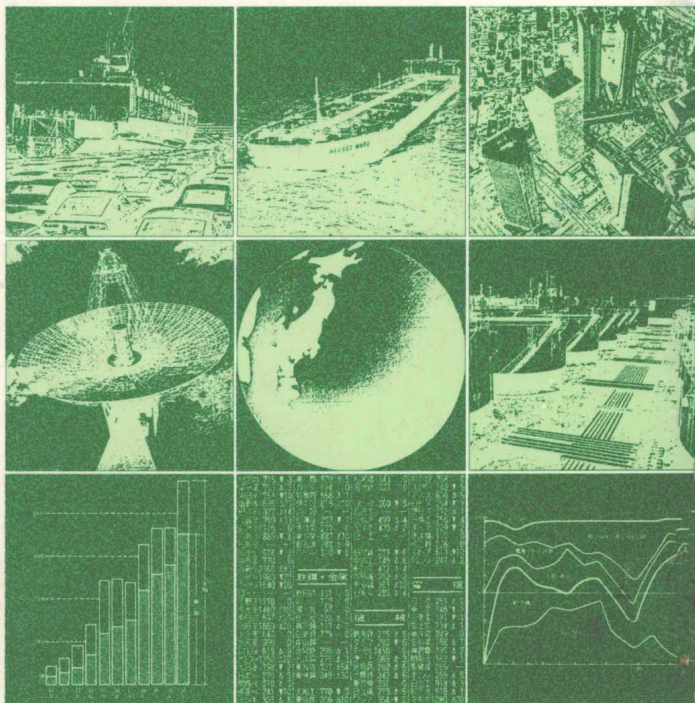


産業界シリーズ No. 309

損害保険業界

森松邦人著

〈全国学校図書館協議会選定図書〉



産業界シリーズNo.309

損害保険業界

森松邦人著



教育社新書

森松 邦人 (もりまつ・くにと)

1926年 佐賀県生まれ。

1952年 中央大学法学部卒業。

現在 株式会社保険研究所勤務 (代表取締役社長)
社団法人共済保険研究会理事

共同執 「保険辞典」 保険研究所, 昭和47年

筆著書 「損保戦後十年史」 保険研究所, 昭和31年

「現代日本産業発達史・保険」 (損害統計の部) 交詢社,
昭和41年

論稿 「日本の保険思想」 保険学雑誌480号

「昭和56年損保答申と '80年代の損保事業」 保険学雑誌
495号

1982年 6月25日 第1刷

1983年 9月10日 第3刷

産業界シリーズ・309

損害保険業界

定価880円

著者——森松 邦人

発行者——高森 圭介

発行所——株式会社 教 育 社

販 売——教育社出版サービス株式会社

〒102 東京都千代田区富士見2-11-10 丸十ビル

電話 (03) 264-5477 (代)

(分)2260 (製)72009 (出)1498 © 森松邦人 1982

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

産業界シリーズNo.309

損害保険業界

森松邦人著



教育社新書

まえがき

本書の執筆が終りに近づいた二月中旬、ホテル・ニュージャパンの火災、日航機の羽田空港着陸直前の墜落、フィリピンでの邦人ツアー機の墜落といった悲惨な事故が相次いだ。刻々と伝えられる被害状況、事故の原因、犠牲者遺族の悲しみなどをTVニュースで視ながら、さて事故の当事者は、どんな、そしてどれだけのリスク処理(保険)をしていたのだろうかということと同時に、あらためて「保険事業」の果す役割や機能の大切さを考えずにいられなかった。それにしても、こうした思わぬ大事故に遭遇する危険がわれわれの生活のまわりに存在している。そして災害の影響の大きさを前にして、いわゆる契約者側の危険管理(リスク・マネジメント)の必要性や、損保業界側の防災技術の提供、アンダーライティングを通したリスク・テイキングの重要性が浮きぼりにされる。

本書は、出版社である「教育社」からの「骨組みはアカデミックに、記述はジャーナリストティックに」という要請に基づいてまとめたものである。旧著が、ルポルタージュ式の立体的な

ものであったのに比較して、平板的であり常識的のそしりを免れないと思うが、「損保業界」に関心のある一般の方々にもわかってもらえるようにということを念頭において執筆した。

構成は、導入部としての第1章に、損保事業の「歴史・仕組み」あるいは損保業界の「今日的トピックス」をおき、次いで損保市場の「構造」(第2〜3章)、「現状」(第4〜6章)、「今後の課題・展望」(第7〜8章)という角度から特徴的な事柄をとりあげているが、紙数の関係もあり十分に意を尽くせない面があることを断っておかねばならない。

最後に、本書の執筆にあたっては、多くの方々のお力添えを得たが、とくに、千代田火災代理店部主査の藤田英明氏には第2〜3章を中心とする業界の実務・実態面等の記述についてご協力をいただいた。また大東京火災総合企画室長の越知隆氏及び城西大学講師の芥潤一氏にいろいろのご助言・協力を賜ったこと、私の勤務している保険研究所損保編集部の方々の協力を得たことに厚く感謝の意を表したい。なお、本書の執筆については、教育社の尾上進勇出版部長、北村知久業務部長からの指名推せんによるものであり、編集制作担当については青桐社の片桐弘道氏のご尽力に負うところが大きい。ここに深く謝意を表したい。

森松 邦人

目次

第1章	わが国損害保険業界の構造的特性と現下の課題	13
1	わが国損害保険事業一世紀の流れ	13
	損保―「冬の時代」／「ベニスの商人」と海上保険／近代保険制度の導入／わが国損害 保険市場の世界的規模	
2	損害保険制度の構造	21
	損害保険の仕組み／損害保険事業・損害保険業界	
3	業界構造の特異性	25
	「二〇社体制」という代名詞／「ウェル・オーガナイズされた業界」／大衆化路線の進 行と効率経営の促進	
4	カルテル体制と市場原理	29
	注目の五十六年答申／揺らぎ始めた「画一体制」	

第2章 損害保険市場の構造 33

1 元受保険市場 33

企業保険市場と家計保険市場／国内損保会社／在日損保外社／共済事業

2 再保険市場 50

再保険の機能／再保険市場の趨勢／海外再保険／再保険専門会社

3 募集機構 56

「直扱い」と「代理店扱い」／ノンマリン代理店制度／直販社員制度／代理店研修社員

制度

4 損害保険の経営組織と運営 64

取締役会と部門組織／事務管理、販売管理、財務管理／営業組織

第3章 損害保険事業に対する規制 79

1 損害保険事業の監督 79

行政当局の許認可／実体的監督主義／普通保険約款に対する規制／資産運用に関する

規制・監督

2 関係法規 84

	『保險業法』／『外国保險事業者法』／『募集取締法』／『地震保險法』／『自賠償法』／『保險契約法』	
3	『損害保險料率算出団体法』と『独禁法』	93
	『損害保險料率算出団体法』／共同行為の必要性と新たな問題	
	第4章 損害保險業界の現状	95
1	經済社会の構造的変化への対応	95
	石油ショックと高度成長の終えん／經營効率化の要請／いわゆる“外圧”の問題／新しい社会的ニーズへの対応／大衆保險商品の多様化と改良	
2	元受營業の実態	104
	八割が大衆保險市場／四五％の占率を示す上位四社／担保範圍の拡大と料率調整／各種保險約款の主な内容と特徴／主要保險種目の業績の推移（元受會社）／營業店舗と査定網の拡充／広報・防災活動	
3	長期性保險の台頭と資産運用	133
	資産運用の実態／財務機能の確立	

第5章 消費者ニーズと商品開発 137

1 わが国の保険思想と消費者ニーズ 137

遅れている損害保険の普及／成熟化社会の進行と保険意識／“消費者ニーズ”と“社会的ニーズ”／モラル・リスクの発生

2 商品開発と販売体制 143

多様化する商品とその整合性／開発商品と販売の即応体制／新しい販売チャネルの台頭

3 消費者対応と代理店募集制度 149

ノンマリン代理店制度の改善／代理店資質の向上／代理店教育と拡充／専属化志向と研修生制度

第6章 損害保険業界と労働組合 157

1 比重を増す労働組合の存在 157

産別労組と単独労組／全損保労組の結成と分裂／全損保労組と損保労連／単独労組

2 過当競争と労働条件 160

経営の効率化と人件費／過当競争と労使の対立／労使協調の要件

第7章 損害保険業界の課題と展望	167
1 昭和五十六年保険審議会答申の主眼	167
複合する変革要因／答申の骨子と焦点／「最後」にして「最初」の答申／答申の背景／競争条件の整備	
2 保険料率の適正化・弾力化	174
料率検証と調整の即時実施／付加保険料率の見直し／大衆契約ほど経費増	
3 保険商品・保険期間・保険料支払方法等の多様化・自由化	180
競争条件整備の具体的手段／ファイル・アンド・ユースの導入／積立型商品の活発化／商品の大規模化と簡素化	
4 行政の弾力化志向	190
保護行政との決別―経営の自主責任原則／保険審議会と行政のあり方	
第8章 損害保険市場の構造的変革	195
1 家計・企業保険市場の変化	195
果して損害保険市場はバラ色か／リスク・マネジメントの台頭／国際化の伸展と外社の進出／政府規制産業に対する公取調査／官公庁マーケットの市場争奪―幹事とら	

ねばうま味なし”

2	業際問題の表面化	205
---	----------	-----

競争条件が焦点／金融関連事業の垣根争い／共済事業との競合／困難な行政の一元化／生保事業等との垣根論争

3	企業間格差と今後の方向	211
---	-------------	-----

競争体制のパラドックス／個別企業の生き残る途／「業界構造は変わるか」／信頼性回復の途

	資料編	217
--	-----	-----

	資料1 自賠責保険金限度額の推移	218
--	------------------	-----

	資料2 在日外国損害保険会社一覧表	220
--	-------------------	-----

	損保各社・関係団体のプロフィール	222
--	------------------	-----

	用語解説	244
--	------	-----

	参考文献	248
--	------	-----

	用語索引	254
--	------	-----

図表目次

図 1・1	主要国の損害保険元受保険料比較	20
図 2・1	新ノンマリン代理店制度の範囲	61
図 2・2	新ノンマリン代理店制度の種別図	61
図 2・3	組織図	66
図 4・1	交通事故の推移	119
図 4・2	資産損益の状態	135
図 4・3	運用資産の内訳	135
表 2・1	国内損害保険会社	41
表 2・2	55年度外国保険会社の元受保険料	47
表 2・3	損保各社の直・代理店扱い比率	57
表 2・4	外勤・集金社員数	63
表 2・5	運用資産構成比と運用収益・利回りの推移	75
表 2・6	従業員数一覧表	76
表 4・1	経営効率の推移	97
表 4・2	主要種目の正味収保	106

表 4・3	正味収保の構成割合	109
表 4・4	火災保険の伸展と経営効率の推移	114
表 4・5	工場・倉庫物件契約の推移	114
表 4・6	海上保険の伸展と経営効率の推移	116
表 4・7	自動車保険の伸展と経営効率の推移	121
表 4・8	傷害保険の伸展と経営効率の推移	121
表 4・9	賠償責任保険の伸展と経営効率の推移	124
表 4・10	保証保険の伸展と経営効率の推移	124
表 4・11	地震保険制度の推移	124
表 4・12	営業店舗の推移	128
表 4・13	主要各社査定拠点・要員	130
表 5・1	昭和50年度以降の新商品開発状況	140
表 5・2	新ノンマリン制度の資格内容・取得方法	152
表 6・1	元受各社の人件費率	161
表 7・1	保険種目別元受事業費率推移（日米比較）	178
表 7・2	長期性（貯蓄型）保険一覧	185
表 7・3	長期積立型正味保険料の推移	187

第1章 わが国損害保険業界の構造的特性と現下の課題

1 わが国損害保険事業一世紀の流れ

損保―“冬の時代”

“銀行―冬の時代”ということがいわれている。アメリカでは、いまや証券業を軸に銀行、保険、クレジットそれに流通業までも巻き込んだ金融関連事業の間で、言わば市場旋風が吹き荒れている。この金融革命ともいうべき嵐が、わが国に渡ってくることは時間の問題という見方が強まっている。要するに、お互の事業の垣根が低くなり相互に顧客の奪い合い競争が熾烈化する中で、銀行はいまのままでは、“冬の時代”を迎えざるを得ないというわけだ。

こうした動きとはいささか趣を異にするが、わが国損害保険業界（以下、損保業界と略称）も、まさしく“冬の時代”に入ろうとしている。戦後三十年余にわたって、一社の新規参入もない市場でどの損保会社も肩を組み、足並みを揃えるかのように高度成長を謳歌してきた損保業界

であるが、それが許されなくなってきたからだ。

一般の景気低迷に加えて、自動車、火災、傷害といった主力保険分野の保険料引下げが大きなブレーキとなっていることが近因である。しかしそれにもまして、中期的展望に立つとき、次の新しい商品をどこに求めるか見当がつかない模索の状況にあるし、生保、共済事業といった隣接事業あるいは外国損保の台頭・進出といった市場環境の変化が激しくなっている。ことに、昭和五十五年度（五十五年四月一日～五十六年三月末日）の業績では、一般産業の売上高にあたる元受保険料収入（異動・解約分を控除）は対前期比五・〇％、純正味保険料収入（上記の元受収保から、さらに再保険関係を相殺したもの）では五・九％という一けた成長に落ち込んでいる。

この一けた成長率は実に昭和三十三年以来、二十三年ぶりのことである。

こうした事業環境の中で、後述するように五十六年六月に出された保険審議会の損保答申では、国内損保の画一体制にメスを入れ、競争原理の導入による活性化と効率化促進を厳しく迫っている。中小系損保の生き残る途は何か、再編成論議を絡めて革新転期の時代が始まろうとしている。

そこでまず、今日の損保業界が事ここに至るまでの過去、現在を捉え、あわせて今後の展望を記述してみよう。